

海軍

ガダルカナル島、戦艦「榛名」奮戦記

佐賀県 山上 篤

海軍志願

私は昭和十三（一九三八）年に能石見高等小学校を卒業し青年学校に入校しました。青年学校では、週三回の農業講座がありました。当時は既に陸軍軍事教練の教科が主体となり、休校日には農業の木炭生産のため、炭山に登り、原料の木の伐採と炭焼きの作業でした。

昭和十四年九月、第二次世界大戦となり、農家の二男、三男は言うに及ばず、長男の私にも徴用の案内が来しました。そして佐世保の軍需工場また

は大町炭坑等からの要請もあり、同級生もあちこちと分かれて徴用されて行きました。

私も長男ながら叔父・喜代太郎の跡をついで、お前も海軍に志願せよと言われ、私も決心しました。出来の悪い頭かかえて鉢巻しながら国語、算数の二科目だけですが、その当時は海軍を志願するには相当に頭もいるよと言われ、暇さえあれば一心不乱に勉強しました。

志願者の選考は鹿島町の三道会の会場で学科試験があり、初めて見る性格異常検査や、また吊るした縄に片手でぶらさがる握力テスト等が行われました。受験者数は三十数人だったような気がします。終わると、二カ月後の三月中旬に採用通知が舞い込んできました。早速ご仏前に供えたわけ

です。

相浦第二海兵团入団

昭和十七年五月一日、入団祝もそこそこに鹿島駅にて多数の見送り人の歓呼の聲に送られて、佐世保第二海兵团相の浦分団に無事入団しました。第二十四分隊第八教班に配属されましたが、知った者は一人もいません。そして志願兵ばかりですから十七、十八歳の若者揃いでした。

私達は兵科でしたので、寝るも起きるも、すべて「総員起床五分前」のラッパの合図で釣床降ろし、釣床納め等です。数回一番後にでもなったら平手打ちを食らうのです。

私も少しは遅くなったこともありましたが、外の者には負けたことは一度もありませんでした。釣床教練が終われば朝食時間は十分余り、それが済めば三万坪の練習場で軍事教練です。私達兵科だったので大砲の弾込め訓練、またボート漕ぎ訓練、山育ちのためあまり海もめつたに見たことのないのに、ボートに乗ってオール漕ぎの練習です。

また、手旗信号の訓練等に明け暮れる毎日でした。あつと言う間に三カ月の訓練が終わり退団となりました。

戦艦「榛名」に乗艦して

八月十五日、戦艦「榛名」三万トンに乗艦命令が出ました。大砲（副砲）分隊第八分隊第八教班に入隊、配属されました。

海兵团とは違い、戦艦は黒い鉄の居室で、各班との境もままならず、海兵团のように吊り床訓練はありませんでした。入浴は二日に一回ぐらいでした。一週間ぐらいしたころだったか、「八月十五日に乗艦した新兵全員は上甲板に集合」との艦内放送があり、新しく乗艦した者三十数人が整列すると、各員交互に上甲板の手すりに寄り「海に向かって思いっきり発声せよ」との号令がありました。各人思い思いの大声を出し合う。これは何のことかさっぱり分からなかったのですが、後で分かりました。

「榛名」には十六門の一五キロ砲があり、各砲

には九人の要員で、『射、施、尺一、二、三、四、五、六』の各部門の仕事が異り、発声練習の成果があつて、私が合格していた昭尺丁は通信、通話の役目でした。こうした毎日の練習の明け暮れでした。これでもう一人前になつたような気がしました。

それから数カ月後、我が「金剛」「榛名」は第三戦隊を組み、巡洋艦、駆逐艦、海防艦十数隻とともに、不思議なことに夜間の出動となりました。目指すは南洋のガダルカナル島までの航海でした。

ガダルカナル島砲撃

昭和十八年二月七日、ガダルカナル島から全兵力一万一千人の撤退が完了しました。突然館内放送があり、「総員見学の位置に付け！」とのことです。何事かと乗員全員上甲板に上がりますと、目も眩むような轟音がして、この暗闇の中を最初の一発がガダルカナル島目がけて打ち込まれました。三式弾、次は吊光灯弾と、数十キロぐらい離れた距離がありますが、三六センチ砲が次々と発射

され、全島が真昼のような明るさとなりました。乗艦員千五百余人が見守る中、各砲は交互に発砲します。これは初めての体験でした。各自は耳に栓をして見守っていました。

自艦の発射だからものすごい。一砲当り百発が限度で、八門で八〇〇発が打ち終わります。

この間、敵の反撃は一度もありませんでした。一目散に三〇ノットの最大加速でトラック島に帰港しましたが、全員「万歳！万歳！」でした。

二度と打てない砲身ですから、主砲の砲身取替えのため呉造船所に帰港し、取替え、再びトラック島に入港しました。そして八月十五日、今度は砲術学校に入校の許可があり「榛名」を退艦することとなりました。乗艦年数は、僅かに一年でした。

横須賀海軍砲術学校入校

九月五日、横須賀海軍砲術学校に入校しました。ここでは対空機銃班に編入させられました。今後は空戦の時代に入るため、大砲だけでは太刀打ち

出来ないので、新しく二五ミリ三連装の機銃訓練を今期より開始することとなりました。

ここでは海兵団とは違い学業に励みながらの訓練も一通りではありませんでした。あつという間に二カ月間修業し、十一月一日に卒業しました。

そして佐世保防備隊に入隊が決まり退校となり、練習生卒業普章のバッヂをもらいました。

佐世保防備隊入隊

昭和十八年十一月五日、佐世保防衛隊に入隊しました。ここでは連日のごとく佐世保鎮守府に公用使となり、カバン持ちとして軍用書類の運び役をしました。

佐世保防備隊より鎮守府市内を通り、海兵団横を通る時は上官と引つ切り無しで会うので、敬礼のため右手を降ろす暇がないぐらいの往復だったのを思い出します。

戻れば内火艇に乗船します。内火艇の右舷左舷に各一本ずつ魚雷を乗せ、佐世保港に入港し、向崎の灯台付近まで行き、舶の出入や不審船の有無

を確かめ、巡回しながら帰隊するというような任務の毎日でした。二カ月ぐらいい過ぎてから今度は「第四司令部付きを命ず」との通達がありました。

第四司令部付き命ず「吉川部隊」

昭和十九年一月十日、横須賀海兵団に仮入団しました。吉川部隊です。この部隊は編成三百人で、隊長は吉川海軍中尉で、そして四つの鎮守府より集まった混成部隊でした。今までは隊外に私用では外出は出来ませんでした。仮入隊中は度々外出の許可があり、町中を飲み歩きました。

入隊二日〜三日後、床に寝て少し暖かくなると、あちこちとかゆくなり、がさがさと音を立て掻いている始末です。起床後によく見ますと、毛布の折り目や下着の縫い目に動いているものがあります。初めて見る着物シラミで、つぶすと赤い血が吹き出す。これは大変とドラム缶で毛布や着衣を茹でたり煮たりしたのですが、湯が赤く染まるほどでした。

各人毛布を乾かしながら、仮入隊だから仕方な

いねと言いながら後始末をしました。お陰でその後の夜は気持ち良く休むことが出来ました。

そして二月一日にここを退団することとなりました。

トラック島入港大空襲

昭和十九年二月一日、横須賀発、我が吉川部隊と陸軍中野隊二千人の両部隊は元南米行き豪華客船「リオデジャネイロ丸」一万トンに便乗して、二月十一日、無事にトラック島に入港しました。

この航海中は交代で、船橋にて望遠鏡で昼夜を問わずの見張りの当直でした。そして事故も無く十日間の輸送に協力しました。

入港しても見張りは止める訳ではありません、二時間ぐらい過ぎたころ、見張り番の私に野田同年兵が上がって来て「山さん、今日は入港祝で御馳走もあるよ」と言って交代しました。まずは食事前に一服するかと煙草盆の所まで行きましたが、どうしたことか吸う気になれない。なぜだろうと思いつつ吸っていました。

やがて煙草盆を離れて昼食でもするかと思ひ、十メートルぐらいその場所から離れラツタルに足を掛けた途端、突如米軍機が来襲しました。

米軍機は爆弾を三個投下、一発は今離れた煙草盆付近、二発目は船倉の一階の食事場、三発目は数分前に交代した見張所付近でした。そこには、つい先ほど交代した野田君の姿はありませんでした。何と云うことか運命は一寸先は分からないものだという体験でした。

モートルック島整備

昭和十九年五月五日、トラック島夏島整備隊に出発しました。そしてトラック島夏島の防衛施設を整備のため一五センチ砲台を設置することとなり、そのために、大発船二隻には砲床、砲座や各種部品を積み込み、二日分の食料を積み出発しました。

一日目は穏やかな天気でしたが、急にしげ出し、大風、大波に襲われ、大発には荷物を満載はしているし、海水は船底にどんどん溜まり、乗員は寸

時の休む間もなくバケツで海水のくみ上げ作業である。こうして今まで経験したことのない重労働をし、全員くたくたになりました。

何時間続いたことか、ようやく一日ぐらい遅れて島に到着しましたが、あと一隻の大発船は沈没したのか、一日〜二日待っても到着しませんでした。そのため残りの人数での陣地構築となりました。

そして大砲の砲台据付のため、不眠不休とはこのことか、まったく昼夜を問わずの作業で、二週間余りで大砲の据付を完了しました。その後は、弾込め、弾薬格納等、操作訓練の連続でしたが、終戦までついに一発も実弾発射はせず仕舞いでした。

終 戦

昭和二十年八月十五日、天皇陛下の玉音放送あり。「なぜ、どうして、今まで負けたこともなかった日本が」と心中やりきれない思いでいつぱいでした。

八月末ごろになって米海兵隊員数十人が、我が軍の武装解除に上陸して来ました。そして担いで来た銃をぼんぼんと積み重ねます。日本の軍隊は三銃を交差させて組み立てて並べるのになあと、どうしてこんなやつらに負けたのかと残念至極でした。

私は、砲術学校卒業生で有章マークを付け、右腕には碇マーク、一四式拳銃を持っていて、万が一、日本兵が米兵に危害を加えたら発砲せよとの任務でした。

飛行場にドラム缶二百五十本を受け渡し、各砲の発射装置を撤去する等、二時間ぐらいで武装解除は終わりました。

【解 説】

体験記筆者は、昭和十六年海軍志願、翌十七年五月、相之浦第二海兵団入団。同年八月、戦艦「榛名」に乗艦、ガダルカナル島への猛烈な艦砲射撃を初めて経験する。昭和十八年八月、トラック島

に帰着、呉造船所で砲身取換後再びトラック島に入港、八月十五日、横須賀海軍砲術学校に入校する。

同年十一月、佐世保防備隊に入隊、鎮守府公用使を勤務。昭和十九年二月、第四根拠地隊司令部付き横須賀海兵団仮入隊、吉川部隊に参加。トラック島、モートロック島警備を体験。

昭和二十年八月終戦により武装解除浦賀帰港、復員す。

体験記筆者の乗艦した戦艦「榛名」は、戦艦「霧島」と共に初めての民間造船所である神戸川崎造船に発注された主力艦である。そして横須賀海軍工廠で建造中であつた同型船の「比叡」を建造した経験を生かした独自の改良が加えられている。

この民間での造船も可能となつたことは、呉、横須賀の海軍工廠に加え神戸川崎、三菱長崎の両造船所の四造船所で四隻の主力艦建造を可能とし、後の海軍力増強に大きい貢献をしたことになる。

「榛名」の竣工は大正四（一九一五）年四月、

以後昭和三年、昭和九年に改装を実施、公式排水量三〇、六六〇トン、水線長二二〇メートル、水線幅二九メートル、速力三〇ノット、主砲三五・六センチ連装砲四門という高速新鋭の戦艦が誕生している。

太平洋戦争、開戦時は南方部隊機動部隊に編入されて南方作戦の支援を行い、インド洋作戦後のミッドウェー作戦では、空母部隊直衛として『飛龍』乗員の救助などにあたつたという。

筆者が参加したガダルカナル島攻撃では、昭和十七年十月十三日、戦艦『金剛』とともに飛行場砲撃に成功している。

昭和十九年六月のマリアナ沖開戦では前衛部隊として第三航空戦隊の軽空母群の直衛を務め、続く比島沖海戦では『金剛』とともに栗田部隊主隊の第二部隊の中核を構成し、サマール島沖海戦では米護衛空母群攻撃に参加した。

呉に帰投後は燃料不足のため、浮かぶ砲台として利用され、米空母機動部隊から数度の空襲を受

けて大破、着底状態で終戦を迎えている。

特殊潜航艇「甲標的」の思い出

広島県 大久保 巧

私は昭和十七（一九四二）年五月一日、呉海兵団・大竹に入団、三カ月の機関科教育を受け空母「瑞鶴」に乘組みとなりました。

空母「瑞鶴」は昭和十六年九月に竣工した新鋭空母で、竣工と同時に真珠湾攻撃に出撃、昭和十七年前半はインド洋作戦、続いて珊瑚海海戦に参加していますが、この珊瑚海海戦では僚艦「翔鶴」は米艦載機の雷撃爆撃を受けて飛行甲板などが破損するなどの被害を受けています。

そして昭和十七年七月機動部隊として第三艦隊が編成され、「瑞鶴」は他の空母と共に第一航空戦隊を編成、私が乗艦したところは第二次ソロモン海戦を控えていた時期でした。

その海戦を終えてトラック島に帰港したのは翌年一月、その後私は横須賀海軍工機学校（電気術）、